

情勢報告

ブルースター疫病対策としての土壌消毒法検討会



疫病があまり出なかった圃場での
話合い

今作も終わりに近づいた5月20日にJA土佐あき芸西支所にて、部会員8名、JA土佐あき芸西支所、農業技術センター病理担当研究員2名の参加により、来作のブルースター疫病対策としての土壌消毒法を点検し疫病対策を検討した。

22園芸年度は、多くの部会員の圃場で疫病の発生は年末からと例年よりは遅かったものの年明けからは圃場の四隅等散發的に発生、被害の広がりが見られた。また、ごく一部には秋から発生し、大きな被害を出した圃場もあった。

そこで、農業技術センターの疫病現地試験に協力する形で、振興センターは部会員に本会への参加を呼びかけた。個々の土壌消毒の実施方法と疫病が発生した場所とを比べながら、また、農業技術センターの土壌消毒法を現地で実際にできるか調整、確認しながら来作に向けた土壌消毒方法の手順を詳しく協議した。結果、農業技術センターが化学的土壌消毒剤とフスマを使った土壌還元消毒法で現地実証する2か所の現地圃場を皆で見守っていくことが確認された。

JA土佐あき柚子部東川支部研究会の開催



奈比賀地区の圃場巡回

6月14日梅雨の晴れ間に東川支部のユズ研究会を35名の参加のもと開催した。通常の研究会は地区全体を巡回するが、今回は南部の奈比賀地区のみで行った。この地区は、果実肥大がよく、新植が多いにもかかわらず青果出荷が少ないため、カラーリング出荷など玉出しへの推進を目的に検討会を開いた。圃場巡回では、茶畑からユズへの新植が多く、現場で仕立て、防除についてお互いに意見を出し合いながら勉強した。研究会では、JAや篤農家から巡回の反省が出て、また振興センターでは、今年のこれまでの作柄、黒点病、すす病対策、カラーリング出荷への取り組みの情報提供をし、その後、意見交換を行った。今年からすぐにカラーリング出荷を始める農家は見られなかったが、新植の農家には少しでも青果率を上げていけるよう助言、指導していく。

芸西村で幼稚園児のピーマン収穫体験



ビニールハウスの中でピーマンの収穫を初体験！

芸西園芸研究会は芸西村の特産野菜のPRのために、高知大学附属幼稚園および芸西村幼稚園を迎えて、野菜の収穫体験を6月17日に行った。

両園の園児とその保護者約150名は、晴天のピーマンハウス内で、汗をかきながら袋いっぱい of ピーマンを収穫体験した。その後、村民会館でJA土佐あき園芸女性部芸西支部が作った地元野菜料理を試食した。芸西村の環境に優しい農業の紹介や、両園児との「ピーマンボ」のダンスを通じた交流などを行った。

振興センターの呼びかけでJAと役場が役割分担を明確にして開催し、今年で12回目となる。振興センターは来年度以降も継続的な開催を求め地元野菜のPRを行っていく。

仲間をふやそう！「土佐鷹」反省会



「話そう」「伝えよう」「誘おう」

安芸集出荷場園芸研究会ナス部会は、6月17日に「土佐鷹」反省会を開催し、23園芸年度新規に栽培を予定している農家や関係機関を含む36人が集まった。「土佐鷹」は23園芸年度の栽培予定面積が伸び悩んでいることから、今回の反省会は「農家自らが‘良いところ’‘悪いところ’を語る」ことをねらいとして開催した。

22園芸年度の部会活動・生育経過・販売情勢の報告に続いて、振興センターから「仲間をふやすためには、まず農家自身が『語る』ことから再スタートしましょう！」と投げかけ、意見交換を行った。農家からは、収量・品質の評価以外にも勉強会の運営方法への提案や「花が咲いてからも枝が太るので垂れた枝も慌てて切ってはいけない」といった栽培技術の具体的なアドバイスもあり、活発な意見交換となった。

振興センターは、23園芸年度も現地検討会などを適時開催するとともに、JA営農課と連携して新規栽培者を中心に個別指導にも力を入れる予定である。